

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号： 24506  
 研究種目： 挑戦的萌芽研究  
 研究期間： 2010 ～ 2011  
 課題番号： 22653026  
 研究課題名（和文） イギリス 18 世紀における勤労育成思想の体系的研究  
 研究課題名（英文） Systematic Study of Industry Development Thoughts  
 in the 18<sup>th</sup> century Britain  
 研究代表者  
 生越 利昭（OGOSE TOSHIAKI）  
 兵庫県立大学・経済学部・教授  
 研究者番号： 30094527

研究成果の概要（和文）： 2010 年および 2011 年の兩年、連合王国のバーミンガム、ロンドン、オックスフォード、グラスゴウ、およびオランダ王国の諸都市において、「勤労育成思想」に関する資料の探索、収集、検討を行った。その分析の結果、18 世紀イギリスにおける「勤労」概念の具体的内容と企業家と労働者に共通に見られる勤労の実態を解明することができた。本研究課題の共同研究を組織し、「勤労育成思想研究会」を 2 回主催し、今後の研究継続の道筋を開いた。

研究成果の概要（英文）： I searched, collected and examined the historic materials concerning “Industry Development Thoughts” at Birmingham, London, Oxford, and Glasgow in the United Kingdom, and at some cities in the Netherlands. As the result of analysis, I could elucidate the concrete expression and the realities of industry in entrepreneurs and laborers in common in the 18<sup>th</sup> century Britain. I also organized the study group and sponsored the two study meetings.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,000,000	0	1,000,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,800,000	240,000	2,040,000

研究分野： 経済学

科研費の分科・細目： 経済思想・経済学史

キーワード： 株式会社、産業革命、独立生産者、実務教育、ボウルトン=ワット商会、ルナー協会、分業、科学の実践的応用

## 1. 研究開始当初の背景

経済学形成期についてのこれまでの研究は、資本主義生産システム構築のための制度形成、市場と国家の関係、それをめぐる経済理論の形成史や思想の展開などに集中し、「労働者」や「企業家」への着目も、「労働」対「資本」という対立軸による一定の枠組みの中で理解されてきた。そこで両者を、経済

発展を担う共通の「勤労者」として一括概念化し、その育成がどのように展開されたかを跡づけることは、経済発展過程についての新たな視点を提起し、これを基盤に「勤労育成思想史」を一貫して探究することは、新たな思想史の書き換えを可能にするものと期待される。

## 2. 研究の目的

いわゆる「産業革命」の展開過程において、「勤勉な労働者の育成」と「進取の気性に富んだ企業家の生成」は、新たな資本主義生産体制の構築のための不可欠の条件であったことを確認し、両者に共通に見られる「勤勉の精神」がどのようにして形成されたか、を具体的な歴史過程の中に探ることを目的とする。これを達成するための様々な国家的政策、多くの著作にみられるイデオロギイの主導、実務教育の重要性に着目した新しい教育制度の構築などの具体的展開を明らかにする。これにより、従来の社会経済体制に代わる新たな体制の担い手の生成過程や思想展開を体系的に解明する。

## 3. 研究の方法

(1) イギリス各地の「勤勉育成」に関する各種資料を探索・収集・検討するとともに、多くの研究者と交流する。(2) 成果を学会や研究会で報告するとともに、研究論文として発表する。(3) 本課題の研究を継続するための共同研究チームを組織し、勤勉育成思想研究会を発足する。

## 4. 研究成果

### (1) 近代的企業組織の意義の解明

本研究では、イギリス 18 世紀の急速な経済発展を可能にした原動力として、それまでの歴史過程において整備された企業組織制度と新しい経営方式、新しい技術を直ちに新しい経営構想に生かすことのできる幅広い知識と応用力を備えた企業家の出現、高度な技術を身につけた職人層や勤勉な労働者の広範な存在等々に着目し、その歴史分析を進めた。企業組織制度については、17 世紀後半以降の「商業革命」時代を牽引した「イギリス東インド会社」の株式会社制度の展開が大きな影響力を発揮したこと、その企業形態は「オランダ東インド会社 V・O・C」の先駆的な企業活動を見習ったものだったことを明らかにした。その特徴は、第一に、取締役の有限責任制と一般出資者の 10 年間直接投資制であり、第二に、「取締役会」などの経営機関の定例会議の義務化、複式簿記会計の採用であり、第三に、会社の出資持分を株式（「アクシー actie」）として取引所で売買する株式制である。

この体制は、クロムウェル政権下の 1657 年に、「イギリス東インド会社」改組の際に採用され、利潤部分のみを株主に配る配当制に基づいた永続的な会社組織が整備された。

このような株式会社制度の発展が、18 世紀における専門的な経営者＝企業者層の形成に重要な役割を演じたことを解明し、この側面の歴史研究に新たな分析視点を付加した。

### (2) 勤勉=生産思想の歴史的解明

17 世紀から 18 世紀後半までの勤勉＝生産思想を跡づけることにより、経済学形成史の再解釈を行った。それは第一に、自然のものを受け取るだけの受動的労働観から、剰余価値を生み出す創造的労働観への転換（労働価値論の成立）であり、第二に、怠惰な労働者を勤勉に働かせるための低賃金経済論から、勤勉な労働者を前提とする高賃金経済論への転換であり、第三に、独立生産者モデルから企業者・労働者連携の資本主義的生産体制モデルへの転換である。

トーマス・ホッブズの受動的労働観を克服したジョン・ロックの労働による所有の理論は、人間自らが労働＝生産によって価値を生み出すことによって自然から自立し、余剰＝富を蓄積し、経済発展を実現する可能性を示した点で、決定的に重要である。本研究は、この重要性を確認し、さらに、次のような分析視角を提起する。

ロックが創造的労働観を提示したとき、彼が想定した労働者は独立自由な生産者であったが、この独立生産者モデルによる経済分析が経済学形成期に広く展開された。しかし経済学成立の指標は、原始的蓄積によって達成された資本＝賃労働関係に基づく資本主義体制モデルの構築であって、両モデルがどのように展開され整備されていったかが、経済学形成史解明のための鍵となる。両モデルの混在と錯綜、労働の担い手が「独立生産者」なのか「賃労働者」なのか、を分析することの重要性を指摘し、個々の思想家における両者の錯綜した関係を解明したことは、本研究の独自の成果である。

### ① ペティからハチスンまでの労働観の変遷

18 世紀半ばまでの主要な思想家の労働観を整理し、自由な生産者の価値創造的労働の考え方が定着していくことを明らかにした。

労働価値論を認識した点で「経済学の創始者」とされるペティ(William Petty, 1623-87)が、土地と労働の二元的価値源泉論を保持し、生存費賃金説に基づく低賃金経済論によって、労働を賃金獲得のための被強制的・受動的な活動とみなした点を解明した。

ロック(John Locke, 1632-1704)の所有論の歴史的意義を、労働の創造的役割の認識に求め、それが「生命・身体・自由・財産に対する自然権」を基盤として、全人格の自由な活動＝生命活動を表現しているという独創的解釈を展開した。それはまたキリスト教的労働観と融合し、労働を基盤に自由に主体的に生きる近代的個人＝「工作人 Homo Faber」の人間像につながるだけでなく、他方で、怠惰な労働貧民を半強制的に「労役場」等に収容し、矯正・訓練して勤勉な労働者に仕立て上げ、産業界の雇用増進を図る貧民教育・雇用論を展開したことを解明した。

『蜂の寓話－私悪は公益』の著者マンデヴィル(Bernard Mandeville, 1670-1733)における「刻苦 diligence」と、勤労 industry」との区別、労働＝苦痛、人間＝怠惰の前提にした低賃金経済論を明らかにした。

デフォー(Daniel Defoe, c.1660-1731)における「高賃金経済論」の重要性、トレードを担う四階層(勤労者、手工業者、親方職人、商人)の密接な分業関係による国民経済発展の姿を展望したその先見性を指摘した。

ハチスン(Francis Hutcheson, 1694-1746)における重商主義的貿易論や低賃金経済論を明らかにし、労働＝生産の担い手として、商人、職人・製造業者、農業経営者が想定され、賃金労働者が家族的な召使いとみなされていることを解明した。

## ② ヒュームの労働観

ヒューム(David Hume, 1717-76)が、剰余価値＝富の源泉を「勤勉な職業」に従事する農民、製造業者、商人の「労働＝勤労」に求め、その社会的分業＝協力関係こそ経済発展の原動力であるとみなし、労働を快樂と幸福の重要な要素とする積極的肯定的労働観を展開したことなど、従来の研究を整備し、さらに勤労の担い手を自由な独立生産者として描くヒュームの特徴を独自に解明した。

## ③ J. スチュアートの労働観

スチュアートにおける農工分離による剰余価値生産の論理を明らかにし、自由な「勤労」と強制的な「労働」の区別、および為政者の重要な役割の認識がスチュアートの独自性であることを解明した。またスチュアートが労働者と雇用者の関係を純粹に資本主義的とみなさず、自由な勤労者同士の相互利益関係とみなしていることを明らかにした。

これは、従来の研究を一步進めた貢献である。

## ④ スミスの労働観

スミスにおいて、資本・賃労働関係や三階級三分配関係に基づく資本主義的生産体制を認識する経済学が成立したとする、従来の通説的な研究を整理したうえで、スミスの「商業社会」概念の中に、労働者も資本家も包含する独立生産者の対等な関係が描出され、それがスミスの経済学体系の中に一貫して流れていたことを解明した。この分析は、これまで曖昧だったスミスの「一般的富裕」の本質を解明した点で、独自のものである。以上のように、イギリス 18 世紀の経済学形成史を「勤労=生産」を担う「独立生産者」視点によって再構成したことは、故小林昇教授に代表される先行研究を継承発展させる意義をもっている。

## (3) 産業革命期の勤労育成思想の解明

従来の産業革命研究が、労働者階級と資本家階級の対立を重視し、その実態を個別に分析してきたのに対し、本研究は、資本家的経営者と労働者の相互補完的關係を、両者に共通なキーワードである「勤労」概念を通して解明した。ここでは特にワット＝ボウルトン商会の経営活動、技術革新や合理的経営を支えた知的基盤、労働環境改善のための保健互助会の実態を解明した。

### ① マシュー・ボウルトンの経営活動

ボウルトンの経営的才能が、彼の家庭環境、父からの実務教育、バーミンガムという振興都市の職人的関係の中で育成されたことを解明した。「ソーホー製造所」の経営において、製造部門と販売部門の分離という近代的経営形態を採用したことを明らかにした。

### ② ワット・ボウルトン商会の経営活動

ボウルトンの共同経営者となるジェムズ・ワットの天才的技術能力が、虚弱体質からくる慎重でち密な性格、父の仕事場での実務教育、ロンドンにおける 1 年間の徒弟修業など、様々な要因によって形成・開花したことを解明した。回転式蒸気エンジンの大量生産方式の導入がボウルトンの先見性だったことに着目し、自力で問題解決を図る幅広い知識と広い視野、新技術の将来的可能性や他人の能力を瞬時に見ぬく判別力、多くの有能な人材を集めて協力する社交的性格など、重要な経営能力をボウルトンが努力と精進によって身に付けて行ったことを明らかにした。

③ 技術・経営=勤労を支えた知的基盤  
ボウルトンやワットの知識や技術の修得や合理的経営精神の育成にとって、彼らを取り巻く広い知的ネットワークが大きく貢献したことを解明した。それは当時の科学的知識の現実社会への応用、科学器具の消費や巡回科学講義の普及などを背景にし、「ルナー協会」に集まった多くの人材を中核としていた。この時期の科学の実態解明は、科学史研究における一定の貢献となる。

④ 労働意欲の喚起と労働環境の整備  
当時の労働環境としては異例のソーホーにおける社会保険制度の事例を解明した。高賃金を保障した8段階の賃金制、それに応じた保険料の支払いと救済制度、労働者の住宅設備建設、勤勉な生活習慣と技術力向上のための規律保持などの実態を明らかにした。これによって、産業革命期の経営者と労働者との連携協力体制の一端が解明され、この領域における新たな研究視点を切り開いた。

(4)「勤労育成思想研究会」の発足・開催  
本研究のもう一つの目的は、多くの研究者との研究交流を基に、勤労育成思想に焦点を合わせた思想史全体の新たな読み替えを行うための共同研究チームを組織することであった。これを実現するために、研究会を発足させ、以下のように二回の研究会を開催した。今後は、これを継続させ、より多くの研究者を集めた研究チームを組織する予定である。

① 第一回 勤労育成思想研究会  
日時：2011年10月1日（土曜）、13時～  
場所：兵庫県立大学「淡水サロン」

◎研究会の趣旨説明：世話人 生越利昭  
◎第1報告（13時10分～14時20分）  
松本哲人「J・プリーストリーの教育哲学—実践的教育論および勤労の育成—」討論者：林直樹（京都大学）

◎第2報告（14時30分～15時40分）  
松山直樹（北海道大学）「A・マーシャルにおける経済進歩と「移動性」概念—アメリカの産業状態に関する考察をめぐって—」討論者（紙面）：近藤真司（大阪府立大学）

◎第3報告（15時50分～17時）  
宮林和弘（関西大学経済学研究科修士課程）  
「ミルトン・フリードマンの新自由主義思想と麻薬合法化論—J・S・ミルの自由主義思想の継承と断絶に焦点を絞って—」討論者：佐藤方宣（大東文化大学）、吉野裕介（京都大学）

◎次回以後の打ち合わせ（含懇親会）（17時30分～）

② 第二回 勤労育成思想研究会  
日時 2012年1月29日（日曜）13時～  
場所：兵庫県立大学「淡水サロン」

◎第1報告（13時10分～14時40分）  
林直樹（京都大学）「ヘンリ・ペーカー：ミクロ世界の哲学者」討論者：小沢佳史（東北大学）

◎第2報告（14時50分～16時20分）  
上宮智之（大阪経済大学）「エッジワースと男女賃金論」討論者：塘茂樹（京都産業大学）

◎第3報告（16時30分～18時）  
生越利昭（兵庫県立大学）「産業革命期における勤労育成の問題—マシュー・ボウルトンの活動—」討論者：松山直樹（北海道大学）  
（報告45分、特定質問10分、リブライ5分、自由討論30分）

◎次回以後の打ち合わせ（含懇親会）（18時15分～）将来の研究書出版構想について

5. 主な発表論文等  
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

- 〔雑誌論文〕（計3件）
1. 生越利昭（崎田康雄と共著）「マンデヴィルの啓蒙思想とコーヒーハウス—市井の著述家の誕生—」『商大論集（兵庫県立大学）』62巻1・2号、111—146頁。査読なし
  2. 生越利昭「書評 Ryan Patrick Hanley, *Adam Smith and the Character of Virtue*」『イギリス哲学研究（日本イギリス哲学会）』34号、85—86頁、査読なし
  3. 生越利昭「経済学形成期の労働=生産思想」『商大論集（兵庫県立大学）』63巻3号、47—84頁、査読なし

- 〔学会発表〕（計4件）
1. 生越利昭「産業革命期における勤労育成の問題—マシュー・ボウルトンの活動—」（第2回「勤労育成思想研究会」、2012年1月29日、於：兵庫県立大学「淡水サロン」）
  2. 生越利昭「経済学形成期における労働観の変化」（「経済学史学会」第75回全国大会、2011年11月5日、於：京都大学）
  3. 生越利昭「経済学形成期における労働観の展開」（「啓蒙と経済学研究会」、2010年12月4日、於：京都大学）
  4. 生越利昭「明治啓蒙における経済思想—福沢諭吉を中心に—」（「経済学史学会」第74回全国大会、2010年5月22日、於：富山大学）

〔図書〕（計 1 件）

共著：佐々木武・田中秀夫編著『啓蒙と社会  
－文明観の変容』京都大学出版会、第 15 章  
「明治啓蒙における経済思想の展開－福沢  
諭吉を中心に－」執筆、2011 年 3 月 31 日  
393-434 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

生越 利昭 (TOSHIAKI OGOSE )

研究者番号：30094527